

Title	"研究・技術計画"のディシプリンを問う
Author(s)	
Citation	年次学術大会講演要旨集, 10: 295
Issue Date	1995-10-05
Type	Presentation
Text version	publisher
URL	http://hdl.handle.net/10119/5471
Rights	本著作物は研究・技術計画学会の許可のもとに掲載するものです。This material is posted here with permission of the Japan Society for Science Policy and Research Management.
Description	シンポジウム

「“研究・技術計画”のディシプリンを問う」

講演者

三隅二不二	(筑紫女学園大学)
宮川 公男	(麗澤大学)
市川 惇信	(人事院)
山田 圭一	(電気通信大学)

コメンテータ

児玉 文雄	(東京大学)
太田 利彦	(ポリテクニクコンサルタンツ)
内藤 哲雄	(動力炉・核燃料開発事業団)

企画の趣旨

学会創設10年目にあたり、本学会が目指すディシプリンのあり方について問い直し、さらに認識を深める必要があろう。本シンポジウムでは、“研究・技術計画”の関連領域で学際的学問領域の形成に努力してこられた方々を講演者に迎え、その学問観を開示していただき、本学会の今後の学問的営為の参考としたい。

本学会のディシプリンの特色として、次のような諸点を挙げることができる。①) 学問の対象が“科学技術”や“研究開発過程”にあり、②その対象の行為者としての“研究者／技術者”あるいは“研究開発組織”さらには外延的な“政治／経済／産業社会”を含み、また③特に“計画者”の視点における有効性が問われている。

元来、学問的営為は分析的アプローチを多用し、本学会がめざす計画者の視座に由来する形成的アプローチを不得意としている。そこでまず第1に“実務的実学”の学としてのあり方が問われなくてはならないであろう。

次に科学技術にかかわる行為者（集団）ないし受容者（集団）という“人間活動システム”（ビーター・フェランド）を対象としている点に関連し、第2に、学としての論理的厳密さないし追究する客観性／普遍性の質の問題が問われなくてはならない。

また、第3には概念的レベルにおける対象としての“科学技術”や“研究開発過程”そのものに由来する特質についても考慮されねばならない。

いずれにしても、伝統的学問の枠組みにはおさまらない学際的学問領域を本学会では対象としており、第4には“学際的学問”としての形態のないし質的特色が問われなくてはならない。

以上のような問題意識のもとに、講演者は、それぞれ講演者自身の研究領域について、そこで妥当とされている学問観を総括的に紹介し、御自身の学問論を展開されることが期待されている。

コメンテータは、本学会に深くかかわってきた立場から、講演者の発言を本学会の枠組みに捉え直し、本学会がとるべき学のあり方について建設的なコメントや指摘が望まれている。